

# 日露戦争従軍日誌と父への手紙

元新発田駐屯地援護室勤務 佐藤 和敏

明治37年2月5日午後7時、第2師団（仙台にあった師団で第16聯隊は隷下部隊）に動員下令。（部隊の平時編成を戦時編制に移し兵士を招集すること）東京の近衛師団及び九州小倉の第12師団と共に名誉ある先頭第1の動員となりました。

当時の満州軍編成表を見ても、最も早い2月10日に部隊が編成され、第1軍の黒木為楨大将の下に編入となりました。

その後、約一カ月おきに部隊が編成され、第4軍の編成は同6月30日となり、新編成の鴨緑江軍は翌明治38年1月12日の編成となっています。若干3個師団の編成（当時師団の戦時編成は2個旅団、4個聯隊から成り、聯隊は3個大隊12個中隊で編成されています。当時歩兵第15旅団は新発田の旧県立病院付近に設置され、歩兵第16聯隊、歩兵第30聯隊（五泉市村松）が属しています。1個大隊は約1800名、よって聯隊では約5400名に上り、その4倍の2万1600余名が1個師団で、第1軍の人数は単純計算で6万4800余名になりますが、防諜上伏せているのか正確な人数の資料がなく推測です。他の軍は4個師団以上の編成となっています）の第1軍でしたが、当時ロシアでは精鋭の日本軍主力と視ていたようです。

野戦歩兵第16聯隊は2月12日動員完結先の日清戦役同様、応召（在郷軍人の召集）への意識が非常に高く北越全地域から、わずか一週間足らずで動員を完結しました。

22日には「聯隊長 谷山隆英以下北越三千の将卒は宮庭に整列し、軍旗を奉迎して荘厳なる出戦式を挙行了」とあります。新発田町民の歓呼の声に送られ、第1大隊はこの日に出発。翌23日には事後の隊が菖蒲城を発し征露の途についたと記されています。

鉄道もようやく沼垂まで開通し、新発田から現新潟市沼垂までの行軍移動で済みました（日清戦争時は福島郡山駅まで行軍移動をしています）

聯隊は、沼垂駅から長野碓氷峠経由で高崎、東京、広島駅と汽車で移動し、一カ月後の3月20～21日の両日で輸送船（加賀丸、第二永田丸、横浜丸、孟買丸）4隻に分乗し宇品港を出港しています。

ところで、日露戦争というと代名詞のように出て来る二百三高地の戦いですが、この戦闘に充てられた部隊は、5月31日編成の第3軍、乃木稀典大将率いる部隊です。

ここ新発田からも2個大隊編成の特設聯隊、後備歩兵第16聯隊（聯隊長、新妻英馬大佐）が編成され、後備歩兵第1旅団隷下で6月19日宇品港を出港し二百三高地の攻撃に参加しています。（白壁兵舎広報史料館に当時の遺品等多数展示されています）

この聯隊は、明治37年2月18日軍旗拝受（赤綵の軍旗）6月5日、新発田兵營出発、6月25日大連湾東方に上陸、二百三高地の攻撃の後北進し、奉天北二里にある田義屯の

戦闘においても活躍しました。明治38年9月14日、対敵行為中止、11月帰路に就き11月30日～12月3日の間に新発田に凱旋しています。

さて、第1軍に編入された野戦歩兵第16聯隊は、明治37年3月26日、大同江口鎮南浦（現在の北朝鮮）に上陸し北進の途につき、初戦である鴨緑江付近の戦闘以来、九連城～摩天嶺～石門嶺～様子嶺～遼陽～弓張嶺～黒英台～沙河の会戦～陽城塞～奉天と転戦しました。

この戦争に兵卒として参戦し、野戦歩兵第16聯隊第3大隊第9中隊第3小隊所属であった田中勝蔵氏（旧豊栄出身）が37年2月5日の召集から38年12月28日の除隊日までを綴った征露日誌（史料館に展示中で内容はまだ公開されていない資料です）がありますが、日誌の一部で明治38年3月7日（奉天開戦）の内容を紹介します。これは兵卒から見た戦場の様子を純粋な目で見、ありのままの景況綴ったものと思われま

「七日晴 午前四時弾薬補充として鉢巻山に補充す。終りて食事をなし（食事をして）休憩して午後一時、我昨日点戦の敵兵前方の高地に赤十字を立て、この時点休戦を乞う我軍もこれに応ず、彼我ともに射撃は直ちに止まり、我軍よりも第十二中隊長、山本大尉、敵の軍医互いに我占領せし鉢巻山左の高地に出会い、手に手をにぎりに祭奮（お祭りのように興奮する様子）を催し、四方山の談話になる、その時彼我の衛生隊は出て死傷者を收容し敵はこれにありて不肖（愚かなことに）煙草を乞う、写真師来たりてその景況を写す実に文明の戦闘なりと感じたり」と書き記しています。勿論このあと赤十字の旗を降ろすと同時に再び戦闘が開始されています。

日露戦争は武士道と騎士道の最後の戦いと言われていますが、現代戦では理解しがたい戦闘です。（筆者元防人感想）

又、戦地から父に宛てた手紙で、差出人が征露野戦第1軍第2師団歩兵第16連隊第2大隊第7中隊第3小隊 前田法観 宛て 新潟県新潟市西堀通一番町 西祐寺様（実家がお寺）に遼陽での戦闘及び敵兵について次のように書かれています。

「夜敵は我が兵を少数とあなどり盛んに楽隊を奏し喊声を挙げつつ我が左翼に突貫（突撃）し来り 特に敵の決死隊は裸体にて爆裂弾をかかえ先頭となりて前進し我軍に投下すその将校の一人は爆裂弾を抱きたるまま我が射撃に倒れ自己の爆裂弾のため自分の身体を粉碎され無惨の最後をとげ候 我が左翼たる三十聯隊及び十六聯隊の一部は勇戦奮闘したるため敵の先頭部隊はほとんど枕をならべて全滅し流石優勢の敵も辟易し武器及び例の楽器 ラッパ 太鼓等を遺棄し敗走す」

もう一通には、氏が明治37年10月、三家子の戦闘において敵砲弾で負傷した状況を冷静に記録している手紙です。

「我軍は勇を哉して（勇ましさを見せる時に）散開突撃せしも敵も去る者仲々一步も退却する模様之れ無く遂に我は断然銃剣突貫（堅く決心し銃剣突撃に移ること）に移り恰も（ちょうど）高地の崖下に達せし際 右に在りし敵の砲兵陣地より打ち放せし一発の砲弾

が小生の頭上に轟然爆発せし音を聞くと同時に早くもその破片の一部は小生の下顎部を横に左より右に貫通し幅八センチ長十三センチの間の骨を裂き取られ候。その際小生の感覚には恰も（まるで）炎の如き熱塊が我が下顎部に衝突せしが如く「にわかには全身に一大苦悩を起し五体は持てる銃と共に大地に転倒せり」とあります。

聯隊史にもこの時の戦闘の様子が次のように書かれています。

「明治三十七年十月、沙河の会戦で同十一日、三家子付近の激戦において軍旗先頭に立ち敵前二百メートルに肉薄したとき、一発の巨弾が軍旗中央を貫通、破れた旗片は空中に舞い旗手須藤少尉の肩に落ちた。余勢は旗護兵二名を傷つけ重傷を負わしめた」とあります。この戦闘以降終戦まで聯隊旗は硝煙で燻った竿頭の御紋章と周縁の紫綵のみとなり、また是が名誉であったという。

この戦闘において第1軍司令官 大将 黒木為楨より歩兵第16聯隊に対し感状二通が送られていますのでここで紹介します。

一通は歩兵第16聯隊に対して、「感状 明治三十七年五月一日鴨緑江付近の戦闘以来摩天嶺及び黒英台初戦に於いて勇敢なる戦闘をし遼陽北方の会戦に於いては平坦開潤の地を直進し勇猛果敢の攻撃を以て陽城塞の高地を奪取し軍の攻撃前進を容易にした功績」

もう一通は、同第1大隊に対してのものです。「感状 明治三十七年十月十三日楊城塞附近の戦闘に於いて猛烈果敢なる攻撃の後最も頑強に防御している敵高地を奪取その行動壮烈にして功績顕著である」との感状です。第一大隊長 仁平宣旬少佐はこの戦闘で戦死されています。軍旗がこれほど敵に近づくことはありません、いかに激戦の地であったかがうかがえます。

野戦歩兵第16聯隊は明治37年2月、新発田を出発してから翌38年12月までの1年10ヶ月、ようやく凱旋の途に着くことができました。

12月12日には大連を出港、15日、広島港着、18日、広島駅発新津駅へ、聯隊の帰路は新津から新発田兵営まで徒歩での凱旋パレードとなりました。このとき沿道からは労をねぎらい惜しめない感謝があったと記されています。12月22日には第1陣の軍旗・聯隊本部・第1大隊本部・第1中隊が帰還。その後各大隊ごと帰還し、暮れの30日に復員が完了しています。

これはほんの一部の紹介ですが、新発田駐屯地 白壁兵舎広報史料館にはまだまだ数多くの資料とエピソードが沢山あります。興味のある方は是非ご来館ください。